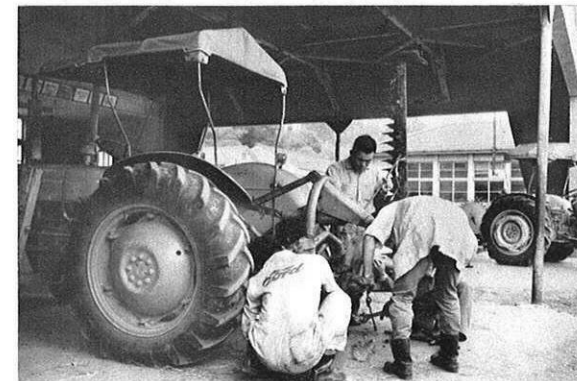


畜産技術指導職員の活動

広大な草原がひろがる阿蘇は昔から畜産王国として知られているが、戦後の阿蘇酪農は急激な発展をみている。そして小国地方の外国産乳牛の輸入は、ひとつのエポックでもあるわけだ。こういった新しい畜産経営の普及には強力な県の指導が必要であり、そのための現地の畜産技師の活動は重要な意味をもってくるわけである。

(写真・阿蘇郡小国町にて)

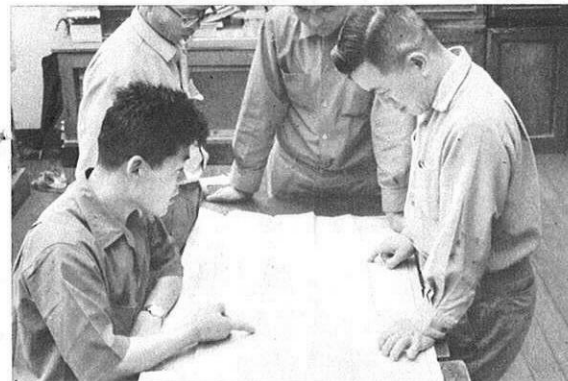
下・大規模草地改良のための機械化も完備



下・ジャージー牛も予想以上に発育が良好



上・牛乳のビン詰作業場も時々のぞいて…



上・牧場の営農計画にも細かい助言を…



▲第一線の人びと▼ 畜産技術 指導職員

■ 阿蘇郡小国地区駐在
T技師の場合

阿蘇郡小国町が集約酪農地域に指定されたのが昭和三十一年。これを契機に小国町の酪農計画は急速にふくらんだ。翌三十二年にははるばる豪州からジャージー乳牛が輸入され、同時に酪農四カ年計画が第一・第二次とたてられジャージー乳牛を中心としたこの町の酪農経営は順調にのびてきた。現在では当時の五百五六頭から一挙に千二百三十七頭の伸びというめざましい実績に到達した。一方処理場や集乳所の施設も充実され、町営の三共牧場をはじめ五百餘の牧野改良も着実に進められている。

企業の酪農への試み

ところで県阿蘇事務所畜産課のT技師がこの小国地域の酪農推進指導のため小国町に駐在派遣になったのは、小国町が豪州からジャージー乳牛を輸入した年のことだ。T技師にとっては、この外国産の乳牛は全くの素人で、農林省の資料や各方面の文献を頼りに実地対策を考える以外に方法がなかった。ともかくもアン

スタントである町の酪農指導員たちとも精力的なたかひがはじまった。

一番むづかしかつたのがジャージー乳牛の飼育管理と牛乳の販路・流通の問題だ。在来のあか牛の粗放な飼育に対して、牧草管理はかなり科学的な方法が必要になってくるし、農家が牛乳を出荷する際、冷却処置の徹底を期する指導などすべて新しいやり方に移行しなければならなかった。そして最大の難関が牛乳の販売合戦だった。

ジャージー乳牛は脂肪率が普通の牛乳に比べて約二倍も高いし、コクがあつて甘味がある。しかし当時は牛乳のメーカーもジャージー牛乳は本格的には取扱ってなかった。従つて主な取引先の北九州市場でも買手市場としてのなやみとあい路がつきまじつた。乳価と需要のバランスを維持するため綿密な市場調査の上で立っての生産の向上にも力を入れていった。それやこれや手探り状態の中での悪戦苦闘が結実して、当時経営農家五〇戸が現在では三百戸までにふえたとし、勿論取引出荷量も月千キから七千キにグンと伸びて安定した市場を確保するまでに成長した。いうまでもなく、このめざましい実績の過程には町農協の一九となつての努力や酪農家の研究とネバリ強いたたかひがあつたのである。

アイデアと熱意と夢

ここで、T技師に牛乳の継続出荷がう

まいく経営指導の秘訣をきいてみるとこういふことだ。つまり季節搾乳という方法で、初春から晩秋にかけて乳をうんとしほす。そして冬期は乾乳させておく。そのために牛の分娩は三、四、五月という具合に計画的にやれば、牛は楽な状態で良質の乳をたくさん出していけるといふわけ。こうした合理的な酪農経営が今後充実されていけば、今までの副業としての酪農から酪農を主体とした企業の経営への移行も容易にならう。加えてこの町ではすでに耕うん機、搾乳機、自動給水機などの機械化が本格的に進んでいるし、三共、田原、黒淵などの牧場施設も改良されいよいよ草地酪農への体制は殆んどでき上つたも同然である。

これからの問題は農家意識をさらに高めていくことだが、T技師の農家指導は主に農閑期の冬である。この頃になると土、日曜は返上で部落ごとの座談会に出席することになる。つい熱が入りすぎて朝帰りになることもたびたびである。ジャージー牛の飼育管理は慣れるまでの実地指導に根気がいる。しかしこういふ各部落の牛舎に入りこんでの経営農家とのふれあいがあつてこそ、酪農指導も徹底されていくわけ。

「ジャージーT技師」の日常

T技師の目録は農協と牧場を時計の振子のように往來することだ。農協では、流通対策、処理加工の検査指導、計画の

立案、打合わせなどの仕事が行っているし、牧場では施肥、放牧、飼料対策、それに見学団の案内等々といったような多忙ぶり。見学団といへば、年間約五千人がこの町の農協の酪農施設や牧場を訪れては熱心にメモしたり、資料を集めたりして帰っていったという。

日本では初めてという、六カ月末満のジャージー牛を育てる共同育成所、牛乳冷却所、それにブロック式のパンカーサイロなど、すべてオリジナルで当町ご自慢の酪農施設である。熱心な視察員や団体とのつながりもT技師の場合、多いようだ。ことしの正月には、「ジャージーT技師殿」とシヤレこんだ賀状が舞い込んできてT技師を苦笑させたものだ。

T技師がゆつくり家庭に落着くのは盆と正月ぐらいのもので、フトしたはずみで子供たちの意外な成長に驚きいるといった有様。

ことしの一月、三共牧場の天皇杯受賞を機にT技師の努力は小国町長からの感謝状という形で実を結んだ。だがしかし阿蘇の草地酪農はこれから本番でもある。「ジャージー」の特性を生かした酪農を考へる場合、阿蘇地帯は最適。そして阿蘇と九重を中心とした九州のミルク地帯の実現は夢ではない。T技師の夢は果しなくひろがる。ゴム長をはいたT技師は西部をおもわせる三共牧場の青いスロープを今日も活歩していることだろう。